

ふれあい訪問 50

シルクロードの起点・西安に「ご本尊」を迎えた夫婦

浄土真宗本願寺派浄宗寺坊守の
釋唯香さんのふる里を訪ねて

中国と日本を仏法で結ぶ3人の方を、今回はご紹介いたします。シルクロードの起点・長安（現在の中国・西安市）から、広島市安佐南区の浄宗寺の坊守となった釋唯香さん（37）と、孫の誕生をきっかけに、西安に「ご本尊」を迎えた釋唯香さんのお父さんの嶺南安さん（69）とお母さんの呉俊玲さん（58）です。嶺南安さんと呉俊玲さんを西安に訪ね、言葉や宗教も、文化も、風習も異なる日本へと娘を嫁がせたご両親の気持ちや、今の思いをお聞きしました。（通訳・孟祥芸）



ご本尊の前で笑顔の一家だんらん

西安の旧正月のお寺の風景



日本留学を縁として

西安市は紀元前から秦、漢、隋、唐などの王朝がおよそ2200年にわたって都を置いた国際都市。とりわけ仏教は縁が深い。インドから仏典を持ち帰って翻訳した法顕、三蔵や玄奘、三蔵浄土教関係では「阿彌陀經」を翻訳した鳩摩羅什、中国浄土宗を大成したとされる善導など、浄土教ゆかりの地が数多く点在しています。

中国名・吳嶺南さんこと唯香さんはこうした仏教と関わりの深い土地で生まれ、高校卒業後、日本語を選んだのも自然でした」と呉俊玲さん。大学で日本語を2年間学んだあと、西安で旅行会

社に勤務。娘さんの縁で両親も日本人と知り合う機会が増えました。「戦争で亡くなった方の追悼とお詫びの気持ちで中国へ来ている奈良のお寺の方の話を聞き、日本への留学を支援して下さることも知りました。これが娘が日本へ行くきっかけです」と呉俊玲さん。これが1988年のこと。その後、唯香さんは日本の旅行社に勤務しました。

国は違っても底は同じ

98年、両親は初めて娘から結婚の話をお聞きしました。「娘を通じて日本人やお寺の方を知っていましたので、それほど心配はしませんでした。風習や習慣に慣れるまで大変だろうと思っただ」（呉俊玲さん）。

「私のふる里は杭州で、近くにお寺が

あり、小さい頃よく家族で参っていました。だから、心配していませんでした」と語る父親の嶺南安さんに「中国では僧侶の結婚は認められていないし、かなり抵抗感があったのでは」と尋ねると、「私たちは熱心な仏教徒とまではいきませんが、仏教の心は理解しているつもりです。そして、その底に流れる教えは同じだと思います。国が違えば形も異なってくるのも、然と思います」とのこと。

孫が通訳、もっと交流を

唯香さんには今、3歳と1歳になる二人の子がいます。一人は日本で生まれたが、二人は昨年3月、唯香さんが生まれた西安の病院で誕生しました。「子どもが大好きなので、とても嬉しかった」と呉俊玲さん。父親の嶺南安さんは「日本のご両親とお話しするときは、3歳になる孫が通訳してくれますよ」と満面の笑みが今の両親の心境を象徴しています。

昨年は5月から半年間、浄宗寺に滞在。「娘もお寺に慣れたようだし、向こうのご両親が何より理解がありますので安心してます。娘も随分と明るくなったように思います。これが縁で日本と中国の交流がもっともつと深まって欲しいですね」と、手放しで喜ぶ父親の嶺南安さんでした。

日本から帰国して二人が知人らに話すことは「日本のお寺はすごいですよ。小さな子どもから90、80歳のおじいちゃんやおばあちゃんがお寺に集まってる。みんなボランティアで助けあっているのですよ。日本のお寺の良さは外国から見た方が分かりやすいのかも」。

二人は、娘に孫ができたのをきっかけに西安の住居に「ご本尊」を迎え、また「日本でお寺にいる時に娘のことを近所の僧侶（門徒）さんが『お寺に一番いい人が来てくれた』と語ってくれた言葉に感動しました。浄土真宗の詳しい教えは分かりませんが、仏さまを思う気持ちは日本も中国も同じだと思えます。こうやってご本尊がある」とより身近に感じることができると、通訳を通しての言葉でしたが、その気持ちが伝わってくるようでした。

仏教が生んだ日本語

大谷大学／編

私たちが日々用いている日本語の中には、驚くほどたくさん仏教に由来する言葉があります。下品、微笑、変化、満団、入院、普段の言葉を輝かせる一冊です。



■1,334円（税別）
発行／毎日新聞社

生きとて生きる」ための指針。年齢を問わず、心に迫ってくる言葉がちりばめられています。



■1,200円（税別）
発行／ユーリーグ

生きかた上手

日野原 重明／著

90歳を越えて、今なお現役の医師として現場に立つ著者が語る「い



■1,900円（税別）
発行／藤原書店

「鶴見和子・対話まんだら」中村桂子の四十億年の私の「生命」——生命誌と内発的発展論
鶴見 和子・中村 桂子著
社会学の鶴見和子と、生物学の中村桂子、かけ離れて見える二つの学問を行う二人が、生命について、人間社会の未来について存分に話し合い、新しい視点を示してくれる一冊。



UNCLE せんどう

